

「二度ない」その他

—「ある+ない」相当の「ない」をめぐって—

山口佳也*

現代語において、動詞の打ち消しの形は、その未然形にいわゆる助動詞の「ない」を付けて作るが、ただ「ある」という動詞にだけはその言い方がない。佐久間鼎著『日本語学』(注1) (昭和26年)では、そのことに触れて、次のように述べている。

存在をあらわす「ある」の打消しは「ない」だけで十分なので、「あらない」の形はつかわれません。

しかし、意味論的にはともかく、構文論的には、「ある+ない」の形が用いられず、その代わりに「ない」を用いていることが、不都合をきたしていないとは言えないようである。本稿では、そのことについて述べてみようと思う。

二

「ある+ない」と形容詞の「ない」とを比較した場合、その部分に限って意味の上から見れば、両者に違いがないか、あっても日常的に無視できる程度の違いしかないと言ってよいかも知れない。それでは、構文論的に見た場合にも、「ある+ない」と「ない」との間にほとんど違いがないと言うことができるであろうか。

今、一般的に、「連用語+動詞+ない」(注2)という形について考えてみるに、そのとりうる文構造は、次の二つであると考えられる。(注3)

A 連用語+動詞+ない

B 連用語+動詞+ない

Aの例としては、例えば、次のようなものを挙げることができる。

① 鼠は決して取らない。(夏目漱石「吾輩は猫である」)

② たゞ議論のための議論をされる位なら、最初から取り合はない方が余つ増したつた。(同「明暗」)
この場合、連用語「決して」「最初から」は、それぞれ、「取る」「取り合ふ」にかかるのではなく、直接「取らない」「取り合はない」の全体にかかっていると考えられる。

Bの例としては、次のようなものが挙げられる。

③ お勝は無理にすすめなかつた。(山本周五郎「かあちゃん」)

④ 若し出さねばならぬものなら、何故出発してから出さないのだ。(志賀直哉「邦子」)

この場合、連用語「無理に」「出発してから」は、それぞれ、「すすめなかつた」「出さない」にかかるのではなく、いったん「すすめる」「出す」にかかり、その全体を助動詞「ない」が包んで、打ち消すような構造になっていると考えられる。

ところで、今仮に、「連用語+ある+ない」という形が存在するとしたら、そのとりうる文構造は、やはり、先のA、Bに相当する次の二つとなるはずである。

A 連用語+ある+ない

B 連用語+ある+ない

ところが、現代語では、「ある+ない」は形容詞の「ない」が代行するわけであるが、それがどのような構造のものとして実現するかが問題である。Aに対応する形については、一応次のように考えて問題がなかりう。

A' 連用語+ない

Bに対応する形については、「ない」イコール「ある+ない」の趣旨からすれば、本来「ある」にかかるべき「連用語」を形容詞「ない」の中の「ある」の要素が受け止め、更にその全体を「ない」の中の助動詞「ない」の要素がまとめて打ち消すという構造をとることになるはずであるが、そのように考えることが構文論的に本当に容認されるものかどうか不明であるし、また、今のところそれを示す方法も見つからない。そこで、ここでは、仮にこれを次のように表示しておくこととする。

B' 連用語+ない

このB'は、文構造上問題がないとは言えないであろう。もっとも、実際には、例えば、

(大雨が) しばしばある+ない

に相当する内容を表す場合

(大雨が) しばしばない。

言うことは余りなく(注4)、

(大雨が) しばしばあるということはない。

(大雨が) しばしばあるわけではない。

* 国文学研究室

などのような言い方をするのが普通である、といった具合に、B' の構造の表現をできるだけ用いないで済ませようとする傾向が強いとは言える。

しかし、特定の形を中心に、B' の構造をもつ表現が用いられることも決して少なくない。

三

B' の構造をもつと見られる例を、以下に幾つか示してみる。

⑤ 一度あったことは二度ないと言えないんだからね。(武田泰淳「審判」)

⑥ おめえだってそんな覚えが二度や三度ねえこたあねえだろう。(山本周五郎「ちいさこべ」)

この場合の「二度ない」「二度や三度ない」を、それぞれ、

二度 + ない
二度や三度 + ない

の構造のものを見ると、「ないことが二度である」「ないことが二度や三度である」というような意味になるはずである。しかし、これらは、前後の関係から、「(一度あるだけで)二度あることはない」「二度や三度あるということがない(ことはない)」というような意味を表していると考えられるから、本来、

二度 + ある + ない
二度や三度 + ある + ない

という構造をもつべきものが、「ある+ない」相当の「ない」を使用することによって、結果として B' の構造のものとなっていると考えることができる。

⑦ さうして君程又損得利害をよく心得てゐる男は世間にたんとないんだ。(「明暗」)

この場合の「たんとない」も、

たんと + ない
の構造のものならば、「ないことがたんとである」というような意味になるはずであるが、実際は、「たんとあるということはない」というような意味であると考えられるから、やはり、本来、

たんと + ある + ない

という構造をもつべきものが、「ある+ない」相当の「ない」を使用することによって、結果として B' の構造のものとなっていると考えることができる。

⑧ 姑と繋ぎあった麻縄を、どのようにしてその松へ絡みつけたか、自分でそうしたのではなく偶然に絡みつけたものかはっきり覚えがない。(山本周五郎「花筈」)

⑨ この山椒魚に幾らかその傾向がなかったと誰がいえよう。(井伏鱒二「山椒魚」)

この場合の「はっきり覚えがない」「幾らかその傾向がない」も、それぞれ

はっきり + 覚えが + ない
幾らか + その傾向が + ない

の構造のものとするのでは、意味をなさない。これらは、本来、

はっきり + 覚えが + ある + ない
幾らか + その傾向が + ある + ない

という構造をもつべきものが、やはり、「ある+ない」相当の「ない」を使用することによって、

はっきり + 覚えが + ない
幾らか + その傾向が + ない

のような構造のものとなっていると考えることができるであろう。

四

⑩ 薄暗い部屋のなかで、薄暗い人から此言葉を聞いた小野さんは、つくづく若いうちの事だと思つた、若いうちは二度とないと思つた。(夏目漱石「虞美人草」)

⑪ 立木は、またとないいい男だよ。(瀬戸内晴美「女の海」)

この場合の「二度とない」「またとない」については、

二度と + ない
またと + ない

の構造のものを見てよいという意見もあるかもしれない。というのは、「二度と」「またと」などのように、度数や分量などを表す語句に「と」が付いてきた連用語は、単に「二度」「また」のように「と」を付けないと言うのと違って、

⑫ いまの名は二度と口にしないでくれ。(山本周五郎「ちくしょう谷」)

⑬ 江戸からゆく者は三年と続かない。(同「いさましい話」)

⑭ それから二十分と経たないうちに、病人はすやすや寝入つた。(夏目漱石「門」)

⑮ 朝飯は殆んど五分とかゝらなかつた。(同「明暗」)

のように、下に打ち消しの表現を伴う場合がほとんどであるため、直接「ない」にかかっていると考えていいようにも考えられるからである。

しかし、「二度と」などの連用語が、次のように、下に打ち消しの表現を伴っていない例も、見られないわけではない。

⑯ 御前さんが外国へ行く時なんか、もう二度と生き

て会ふ事は六づかしからうと思つたのに、それでもよくまあ達者で帰つて来られたのね。(夏目漱石「道草」)

この例の場合、「もう二度と生きて会う事はできないだろう」「もう二度と生きて会うことはないだろう」などとする方が普通の言い方だと言えるかもしれないが、その場合でも、

二度と生きて会う事はできない

二度と生きて会う事はない

などの構造と見るよりは、

二度と生きて会う事はできない

二度と生きて会う事はない

などの構造と見る方がよいのではなからうか。「二度と再び」という言い方もあるように、「二度と」と「再び」とが互いに類義語であると見られるところからも、そのことが言えると思う。

同様に、

⑭ あんなところへ二度と行くものではない。(作例)

⑮ この位切実な経験は自分の生涯中に二度とありやしない。(夏目漱石「坑夫」)

⑯ ここに集まっている連中は一度は、不合格という傷を受けた者たちばかりだったから、二度とあの時の苦い気持を味わいたくないのである。(遠藤周作「灯のうるむ頃」)

の「二度と行くものではない」「二度とありやしない」「二度とあの時の苦い気持を味わいたくない」についても、それぞれ、

二度と行くものではない

二度とありやしない

二度とあの時の苦い気持を味わいたくない

の構造のものとするよりは、やはり、

二度と行くものではない

二度とありやしない

二度とあの時の苦い気持を味わいたくない

の構造のものとする方がよいであろう。先の⑭⑮⑯の「二度と口にしない」「三年と続かない」「二十分と経たない」「五分とかからない」なども、同様の構造のものとすることができる。

このように見てくると、⑩⑪の「二度とない」「またとない」なども、本来、

二度と+ある+ない

またと+ある+ない

の構造であるべきものが、結果として B' の構造のものとなっていると見るのが妥当ではないと思われる。

下に打ち消しの表現を伴うことが多い副詞で、そのか

かりが必ずしもその打ち消しの語にまで及んでいないと思われるものは、他にも少なくない。そのような副詞に形容詞の「ない」が続いている形は、ほとんど B' の構造のものとなっていると言ってよいであろう(注5)。以下に、そのような例をいくつか挙げてみる。

「それほどない」「さほどない」「そんなにない」「さしてない」「たいしてない」「ろくにない」「ろくろくない」など――

「それほど」以下の語は、下にほとんど又は必ず打ち消しの表現を伴うが、これらは、「それほどの」「さほどの」「さしたる」「たいした」「ろくな」などのように、その大部分が対応する連体修飾の形をもっており、また、その意味が、「とりたてて言うほどのさま」「まともで、満足できるさま」(注6)などといったようなものであるところから見て、元々打ち消しの語にかかっている語とは言えないと考えられる。

また、「それほど」以下の語のかかりが、常に下の打ち消しの語にまで及ぶものでないことは、次のような例によってもうかがうことができるであろう。

⑲ 外はまだ降っているが、それほど強い降りではないし、(山本周五郎「あんちゃん」)

⑳ 故国に妻子のない私は、漂泊の民となってユダヤ人の仲間入りするのがさして不自然とも思われなかった。(「審判」)

㉑ あなたのお父さんみたいに、ああヤキモキしても仕方ないよ。世の中のことはそんなに騒がないでもかたづくもんですからな。(同)

㉒ これまで三十年大して面白くもない田舎芝居や浪花節を一手に引き受けて、四国中回してきたのも、いってみればいつか一度は伊予の牛相撲を東京か大阪の検舞台へ持って行くという夢があったればこそです。(井上靖「闘牛」)

㉓ それから田代が何を言ったか、津上はろくに聞いていなかった。(同)

「むやみにない」「やたらにない」「めったやたらにない」「めったにない」など――

㉔ 旗本二千石といえば、それほどむやみに貧しくはない。(山本周五郎「七日七夜」)

㉕ めったにそんなことを言うものではない。(作例)などのような例によって、「むやみに」以下の語についても、そのかかりが常に下の打ち消しの語にまで及ぶものでないことがうかがわれる。

五

「動詞(連用形)+て+ある」の打ち消しの形に相当する「動詞(連用形)+て+ない」(注7)も、広い意味で、B' の構造をもった言い方と考えるべきではないかと思

われる。

まず、「動詞(連用形)+て+ある」の形における「動詞(連用形)+て」は、あるものごとがどういう状態において「ある」かを形容する、広義の連用語であると考えられるから、そのかかりは当然「ある」に向けられたものと言える。そこで、「動詞(連用形)+て+ある」の打ち消しの形は、

動詞(連用形)+て+ある+ない

という構造のものであるべきはずであるが、現代語では「ある+ない」相当の「ない」を用いているために、やはり、

動詞(連用形)+て+ない

のような B' の構造のものとなっていると考えられるわけである。

「——である」「——でない」と言うときの「ある」「ない」は、

㉗ 落書きは既に消してある。(作例)

㉘ 稲はまだ刈り取ってない。(作例)

などの例を見ても分かるように、単にものごとが存在するか否かということを表す域を脱して、意味がかなり形式化しているために、補助用言(補助動詞、補助形容詞)などとして、独立で用いられるいわゆる本動詞の「ある」、本形容詞の「ない」と品詞論的に区別して考える考え方もある(注8)。しかし、かかり受けの面だけに限って言えば、「——でない」における「——て」と「ない」の関係は、⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪などにおける「二度」以下の連用語と「ない」の関係とはほぼ同じであると言わなければならない。

六

「高くない」「静かでない」「学生でない」のように、形容詞、形容動詞、断定の助動詞「だ」などの連用形に「ない」の付いた形も、広い意味で、B' の構造をもった言い方と考えるべきではないかと思われる。

文語では、本来、形容詞、形容動詞、断定の助動詞などを直接打ち消す形がなく、代わりに、それらの連用形に「あり+ず」を付した形、又はその縮約形が主として用いられた。現代語では、これに相当する形として、前述したように、それらの連用形に直接「ない」を付けた形が用いられているが、これらは、文語の言い方に照らして見て、「形容詞(連用形)+ある+ない」「形容動詞(連用形)+ある+ない」「断定の助動詞(連用形)+ある+ない」などの形をとるべきところを、「ある+ない」相当の「ない」を用いることによって、生じているものと考えるのが穏当であろう(注9)。

この場合、「形容詞(連用形)」「形容動詞(連用形)」

「(体言+)断定の助動詞(連用形)」などは、本来「ある」にかかる連用語のはずであるから、上の形は、それぞれ次のように B' の構造のものと思なされることになるわけである(注10)。

形容詞(連用形)+ない

形容動詞(連用形)+ない

体言+断定の助動詞(連用形)+ない

もっとも、「形容詞(連用形)」「形容動詞(連用形)」「断定の助動詞(連用形)」などに付く「ない」を、「動詞(未然形)」に付く「ない」と同じ助動詞と見る見方もあり(注11)、あるいは一般の人にはその方が分かりやすいかもしれない。その主な理由としては、上の形から「ない」を除いた場合に、結果として形容詞、形容動詞、断定の助動詞などだけが残る点が、「動詞(未然形)+ない」の形の場合と似ていること、また、上の形で用いられている「ない」の意味が、形容詞の「ない」のもつ非存在の意味を脱して、形式化していることなどを挙げることができる。

しかし、「形容詞(連用形)+ない」「形容動詞(連用形)+ない」「断定の助動詞(連用形)+ない」と「動詞(未然形)+ない」とを比較した場合、前者では、「ない」がそれぞれ活用語の連用形に付き、間にそのまま助詞「は」「も」「さえ」「など」等を挿入しうのに対し、後者では、「ない」が動詞の未然形に付き、間に「は」以下の助詞を挿入しえないなどの違いがあることから(注12)、両者の「ない」を品詞論的に別種のものとして扱うのが一般的である(注13)。

「高く(は)あるまい」「静かで(は)あるまい」「学生で(は)あるまい」、また、「高く(は)ありません」「静かで(は)ありません」「学生で(は)ありません」のように、現代語においても、形容詞、形容動詞、断定の助動詞などが、打ち消しの意味を含む「まい」に続くとき、また、「ます」を介するとはいえ打ち消しの「ん(ぬ)」に続くときなどには、間に「ある」が現れるところから見ても、「形容詞(連用形)+ない」以下の形における「ない」は、やはり、「動詞(未然形)+ない」の「ない」と違って、「ある+ない」相当のものと思っておくのが適切のように思われる。

七

以上、ごく大ざっぱであるが、本稿でいう B' の構造を持つと見られる言い方の主なものを見てきた。これらの多くは、日常高い頻度で用いられるものであり、また、特に違和感の強いものというわけでもないが、構文論の上から見れば、やはり、変則的なものであると言わざるをえないであろう。このことは、これまで、構文論

的にそれほど大きく取り上げられてこなかったが、特にかかり受けの側面に視点を置いて文の構造を考えていこうとする立場からは、軽く見ることのできない事実であると考ええる。

なお、一般に、「連用語+ない」の形には、A'の構造のものか、B'の構造のものか、判定に迷うものが少なくない。本稿で取り上げなかったもので、当然取り上げてよいものが、ほかにも多いのではないかと想像される(注14)。このようなことも含めて、「ある+ない」相当の「ない」については、考えてみるべきことが、まだまだありそうである。

注1 同書119ページ。

2 ここでは、特定の「連用語」と「動詞」並びに「ない」との関係だけを問題として、他の要素はすべて捨象している。「連用語」は、広義の連用修飾語の略称。

3 厳密に考えると更に複雑に分かれる可能性もあるが、ここでは簡便にこう考えておく。

4 このような言い方も、「——と」など、ある種の文型の中では、用いて変でない場合がある。
例、

この島では大雨がしばしばないと飲み水に困る。(作例)

ついでながら、連用語「しばしば」に助詞の「は」を付けて、

(大雨が)しばしばはない。

のようにすると、それほどおかしく感じなくなる。これは、「は」の挿入によって、文の構造がB'型からA'型に変わるからではないかと考えられる。

5 一般に、連用語のかかりの及ぶ範囲は、強勢の有無などの条件によって微妙に変化するのが普通なので、断定的な言い方がしにくい。

6 『日本国語大辞典』(小学館)では、次のように説明している。

「たいして」の②

(下に打消表現を伴って、程度がはなはだしくはないことをいう)とりたてていうほど。さほどに。……

「ろく(陸・碌)」の⑤

(ふつう後に打消の語を伴う)物事の様子、性質などが正しいこと。まともであること。完全であること。十分であること。また、そのさま。……

7 「動詞(連用形)+て+いる」の縮約形「——てる」の打ち消しの形も、「——てない」となるが、この「ない」は、「いる+ない」相当ということになるので、ここでは、特に問題としないこととする。

8 橋本進吉『新文典別記 上級用』(昭和9年)、森田良行『基礎日本語1』(昭和52年)など。

9 これはほとんど定説となっているといつてよい。「あらず」から「なし」への変遷の過程については、小林賢次「否定表現の変遷——「あらず」から「なし」への交替現象について——」(『国語学』75集、昭和43年)などに詳しい。

10 北原保雄「助動詞によるムード表現の史的展開」(『講座 日本語学 2 文法史』昭和57年)では次のように述べているが、いかがなものか。

②「美しくない」の「ない」は、⑤「花がない」の「ない」のように非存在の実質概念をもっていないが、それでも、「美しい状態で存在しない」というように、なお非存在の概念を保っているので、「美しく」と「ない」とには連用修飾と被修飾の関係が認められる。

橋本進吉『国文法体系論』の考え方もこれに近い。

11 時枝誠記『日本文法 口語篇』(昭和25年)、吉田金彦『現代語助動詞の史的 연구』(昭和46年)など。

12 両者の「ない」の相違点については、三尾砂『語言葉の文法(言葉遺篇)』(昭和17年)、本田鼎治「日本語の否定構文(1)」(『静岡大学教養部研究報告 人文・社会科学』17-2、昭和57年)などに詳しい。

13 動詞の未然形に付く「ない」を助動詞、一方、形容詞、形容動詞、断定の助動詞「だ」などの連用形に付く「ない」を形容詞とするのが一般的であるが、前者を複語尾、後者を形容詞とする山田孝雄『日本口語法講義』(大正11年)の説など、他に様々の説がある。最近では、後者の「ない」をいわゆる本形容詞の「ない」と区別して、補助形容詞(形式形容詞)と呼ぶこともしばしば行われている。

14 例えば、「どことなく」のような言い方も、B'の構造のものである可能性が強い。

(用例は、漱石のものを除いて、現代仮名遣いによった。)